

## 夢のキッズミュージアムへ

今回は、私たちZEROキッズの「夢のキッズミュージアム」を二日間だけ仮設してみました。あの殺風景な、かなり古びたZERO西館の美術ギャラリーが、森に、カフェに、遊園地に変身しました。その変身ぶりは、来た人みんなが「えっ！これが！」と驚くほどでした。

この場所をデザインするにあたっては、こどもたちが最初から関わりました。はじめは全くの夢を描いているだけとみんな思っていました。とにかく自由に、思うままに自分の中の夢を絵の中に表現しました。模型を作った時にも、大人や中学生たちは、ほんとにできるのか？と思っていました。素直に夢の実現を信じ、夢をふくらませたのは、小さい子たちでした。

準備が始まり、まず大きな木の骨組みができました。中央の柱から放射線状に張りめぐらせたワイヤーに、水道管の周りに巻く保温チューブをつけて木の幹をつくる・・・葉をつければ木らしくなるかとつけていくが、まるで洗濯物がぶら下がっているみたい・・・

入れ替わり、立ち替わり、大勢の手が入り、葉が増え、様々なアイデアを出して形にしていこううちに、まるで本物の大きな木が生えているような森ができました。土台を作ってくれた大工さんや学生さん、お父さんお母さんやボランティアは、こどもたちの夢をなんとか実現させたいと、ここまでやるかというほどに真剣に考え、陰で支え、時間と知恵と力を使いました。会場の葉の数は何千枚になったのでしょうか。あの葉を作るために、夜になると家族総出で布や紙の葉を切っていた姿を想像してみてください。

準備期間中、こどもたちは学校が終わると会場にかけつけました。制服のままジャージ持参で来る子もいました。はじめは余裕で遊びながらの作業でした。お化け屋敷では自分たちの衣装に夢中、毎日コスプレ大会です。作業はなかなか進みません。大人がおしりをたたけば早いかもしれませんが、このダラダラした時間もまた大切なのです。好きな音楽をかけながら、お菓子を食べながら、自由にのんびり作業です。

五日間の準備期間中の三日目を過ぎた頃から、真剣に黙々と作業する姿が見られるようになりました。キッズコースターの乗り物の微妙な角度や装飾にも最後までこだわりました。お客さんへの案内板や誘導表示を作ることに気がつきました。役割分担もしっかりして、お母さんたちのキッズカフェの手伝いにも積極的に名乗りをあげました。部活で来られない高校生が切り文字の案内を家で作ってくれたり、皆の気持ちが自分たちの楽しみから、お客さんを楽しませることに向いていきました。

そして迎えた当日、思った以上の大盛況にてんやわんやしながらも、皆、目が輝いています。ブースに座る参加団体の大人もこどももお客さんたちも笑顔です。この森の中はまさに異次元空間、善意のあふれる世界です。こどもがこどもに積極的に声をかけています。生き活きと動き回り、働いています。それを見守るお母さんお父さんの顔にも嬉しそうな笑みがこぼれています。

このイベントで私たちが実証したかったことは、「こどもたちが自分たちで考えて自分の手で作る居場所」は実現できるのだということです。もちろんそれにはたくさんの大人の手と心が

必要ですし、目に見えないところにプロの手も必要です。そして、「こどもの参画」を実現するためには、大人たちの忍耐と意志力、計画性が基になります。

私たち ZERO キッズは、今まで行ってきた創作ミュージカルで「こどもたちと創る」ことを続けてきました。「こどもの参画」を実現するためには、大人にはたくさんの労力が必要ですが、それを補って余りあるこどもたちの「達成感」「喜び」「笑顔」が返ってきます。それは未来へつなぐ生命の輝きであり、喜びです。

大人の価値観のお仕着せでない「こどもたちの場所」、こどもたちが自分たちで考えて自分の手で創る「こどもたちの場所」を、私たちはこれからも創り続けたいと思っています。そのためには、より広くネットワークをつないでいくことが課題です。そのためにも「アート之力」を最大限活用して大人の気持ちをつないでいくこと、「アート之力」により平和への祈りや未来に向かう希望を共に発信していくことを続けていきたいと思ひます。

最後になりましたが、「夢のキッズミュージアム 2007」の実現にあたり始まりからご助力いただいた中埜先生、設営にご協力いただいた中村さん、参加団体はじめたくさんの皆様、お菓子や布、印刷に協賛いただいた企業の皆様、中野区公益活動として助成いただいた中野区に心から感謝を申し上げます。

**「夢のキッズミュージアム」がいつか中野に常設できることを願って・・・**

2007年4月

ZERO キッズ

代表 佐々木 香